

朝河貫一とグレッチェン・ウォレン (Gretchen Warren) の文通 ——イェール大学バイネッケ図書館所蔵「朝河発グレッチェン宛書簡集」について——

甚 野 尚 志

The Correspondence between Kan'ichi Asakawa and Gretchen Warren
— About the “Gretchen Warren Letters from Kan'ichi Asakawa and Related Papers” owned
by Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University —

Takashi JINNO

Abstract

Kan'ichi Asakawa (1873-1948) was a professor of history at Yale University. He studied on the comparative history of medieval institutions between Japan and Europe. As an excellent Japanese historian at Yale he raised many academic achievements. Especially with his book titled “The Documents of Iriki” (1929) he acquired a high reputation among the academics of history in Europe and America. In addition he is very famous for the activities as a peace advocate because he tried to prevent the expansion of Japanese militarism by his writings and his letters to friends. He had many American friends with whom he was in correspondence to discuss the contemporary international situations and to exchange their opinions. Among his American pen friends Gretchen Warren, an American poet living in Boston, was one of the closest friends. They were exchanging their letters regularly from 1935 to 1948. After her death her daughter donated the letters from Asakawa to Gretchen to the Beinecke Rare Book and Manuscript Library of Yale University. Now the letters are kept by the library under the title of “Gretchen Warren Letters from Kan'ichi Asakawa and Related Papers”. This essay aims at introducing and analyzing the contents of the letters.

はじめに

朝河貫一（1873-1948年）はイェール大学の歴史学部に奉職して教育と研究を行い、アメリカの大学で日本人として初めて正教授の地位に就いた歴史学者である。彼は日欧の比較封建制を専門とし、何よりも英文の著作『入来文書（The Documents of Iriki）』（1929年）により、日本の封建制を世界に初めて紹介し、マルク・ブロック、オットー・ヒンツェらのヨーロッパの中世史家から高く評価されたことで有名である。またそれだけでなく朝河は、イェール大学の東アジア図書部長として日本語および中国語関係図書の蔵書形成を行い、アメリカでの東アジア研究の基礎を築くことにも大きな貢献をした。さらに彼は日本の外交問題にも深くかかり、日露戦争の時期にはアメリカで日露対立の原因について講演活動を行い、英文の著作『日露衝突（The Russo-Japanese Conflict. Its Causes and Issues）』（1904年）によりアメリカ人の共感を得ることに成功した。さらにはポーツマス条約後の日本外交に対しては日本語の著作『日本の禍機』（1909年）により厳しく批判し、1941年の日米開戦に際してはルーズベルト大統領から天皇宛の親書案を作成し親書送付による開戦阻止を試みた。このように朝河は優れた歴史学者であっただけでなく、日本の国際的孤立を憂慮しアメリカから積極的に発言を行った知識人であった。

とくに朝河は、書簡により自身の政治的な意見を表明したので、彼が日本やアメリカの友人たちに宛てた膨

大な書簡には、戦争へと向かう日本やヨーロッパの国際情勢を分析し、民主主義と平和の維持を訴えるものが相当数存在する。朝河の場合、自身が出した重要な書簡についてはタイプライターによるカーボン複写版を複数作成し、「公開書簡 (open letter)」として周囲の友人たちにも送っていた。そのため朝河の書簡は受信者以外の多くの人々にも読まれ影響を及ぼした。

ここで紹介したいのは、朝河が「公開書簡」を送っていた友人の一人であるアメリカの友人グレッチェン・ウォレンに宛てた書簡である。グレッチェン・ウォレンは、朝河がアメリカ人のなかで最も多くの書簡を送ったと思われる相手であるが、朝河が1935年以降に彼女に送った書簡がイェール大学のバイネッケ図書館に所蔵された“Gretchen Warren Letters from Kan'ichi Asakawa and Related Papers”（以下「朝河宛グレッチェン宛書簡集」と表記）とのタイトルが付された資料にある。これは3つのBoxからなり、Box 1は1935-1941年の間に朝河がグレッチェンに出した書簡、Box 2は1942-1948年の間に朝河がグレッチェンに出した書簡（日付のない書簡も含む）を集めている。Box 3は朝河がグレッチェンに送った論文の抜刷などが入っている。この資料は、グレッチェンの死後に娘レイチェル (Rachel) により1967年にバイネッケ図書館に寄贈されている⁽¹⁾。以下では、Box 1とBox 2にある書簡について紹介してみたいが、まずグレッチェン・ウォレンはどのような人物かを説明しておこう。

1. グレッチェン・ウォレン (Gretchen Warren) とは誰か

グレッチェン・ウォレンは、朝河の日記や朝河の書簡の控えにおいてG.W. というイニシャルで頻繁に登場する人物である。このG.W. がグレッチェン・ウォレンであることは、我が国の朝河研究ではこれまで知られてこなかった⁽²⁾。しかし朝河の日記を克明に読めば、G.W. がグレッチェン・ウォレンだとわかる箇所がある。朝河は1946年11月12日の日記で、G.W. のことをGretchen Warrenと正確に書いており、そこからこの人物が特定できる⁽³⁾。そしてこの人物はインターネット上のWikipediaにも出ている有名な女性である。

すなわちグレッチェン・ウォレン (Gretchen Osgood Warren, 1868-1961) とはボストン在住で詩人、女優として活躍した女性である。彼女はボストンの有名な医学者ハミルトン・オズグッド (Hamilton Osgood) を父とし、詩人で作家のマーガレット・オズグッド (Margaret Osgood) を母として生まれ、オックスフォード大学で学んだ後、パリのコンセルヴァトワールでガブリエル・フォーレのもとでメゾ・ソプラノの歌唱を学び、またパリのコメディ・フランセーズで演劇も学んだ経歴を持つ。彼女は1891年にボストンの実業家フィスケ・ウォレン (Fiske Warren) と結婚している。ちなみに、彼女の妹マリー・オールデン・チルダース (Mary Alden Childers) は、アイルランド独立運動家でアイルランド内戦時に処刑されたロバート・アースキン・チルダース (Robert Erskine Childers) の妻となった女性である。

グレッチェンは、1897年に夫フィスケと娘レイチェル、妹のマリーとともに世界周遊の旅行をしている。東洋ではセイロン、シンガポール、サイゴン、日本を訪れており、このときに日本文化に対する関心も芽生えたと思われる。またグレッチェンは詩人として多くの詩を残すとともに、ボストンのNew England Poetry Societyを主宰していた。さらにグレッチェンを有名にしたものとして、画家サージェント (John Singer Sargent) が描いた彼女と娘レイチェルの肖像画がある (“Mrs. Fiske Warren and Her Daughter Rachel”, 制作1903年、ボストン美術館所蔵)。ウォレン家はボストンの富裕な名家であり、マサチューセッツ州ハーヴァードのタハント (Tahanto) に農場を持っていたが、グレッチェンはこの農場にある別荘に知識人たちを招き、サロンを形成していた。ここには日本人の客も多く滞在したが、朝河も1915年にグレッチェンから招かれ、彼女

(1) Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University, “Gretchen Warren Letters from Kan'ichi Asakawa and Related Papers”, Box 1: correspondence, 1935-1941. Box 2: correspondence, 1942-1948 and undated. Box 3: related papers.

(2) 朝河貫一書簡編集委員会編『朝河貫一書簡集』（早稲田大学出版部、1990年）では、金井圓氏が「友人W・Gも旧知のドイツ系女性と思われる」と書いており、この人物が誰かを同定することはできなかった（60頁）。少なくとも我が国でG.W.をグレッチェンだと同定したのは筆者が初めてであり、そのことはすでに『朝河貫一研究会ニュース』で書いた。甚野尚志「朝河貫一の戦後の日記（1945-48年）を読む」『朝河貫一研究会ニュース』、No.90、2017年4月、2-10頁。

(3) Sterling Memorial Library, Yale University, Manuscripts and Archives, “Asakawa Papers”, Box 6, Folder 56.

と初めて会うことになる⁽⁴⁾。

2. 朝河とグレッチェンの出会いと文通

朝河がグレッチェンの別荘を訪問したきっかけは、朝河の女性の友人ダイアナ・ワッツ (Diana Watts) の紹介によるものであった。そのことは1915年3月14日の日記に以下のように記載されている [以下の日記の文章は忠実な翻訳ではなく筆者による要約である]。

「3月14日。ダイアナ・ワッツがウォレン夫妻のハーヴァードの別荘であるタハント農場に滞在しており、私も合流した。そこには日本人の姉崎正治などの客もいた。私はその場所でグレッチェンと初めて出会った。彼女は教養ある美しい女性で、ゲートについて語り合った。数日の滞在后、グレッチェンからの誘いでポストンに行きウォレン家を訪問した」⁽⁵⁾。

日記によれば、朝河は1915年の5月末にもこのグレッチェンの別荘に滞在し、このときには彼女と禅について語り合っている。さらに1916年の1月28日から2月1日の日記でも彼女の別荘での滞在を次のように記載している。

「1月28日から2月1日。私はハーヴァードのグレッチェンの別荘に滞在した。私はそこにいた何人かに禅について説明したが、それを十分に理解できたのはグレッチェンのみであった。彼女の知的な能力は抜群であり、哲学や文学についての広範な知識を持っている。しかし彼女の場合、こうした知識を積む目的は何より自身の精神を霊的に高めるためである。彼女の会話は知性あるウィットに富んでいる。彼女の語る話は人々を魅了する。彼女は私に『あなたと最初に出会ったときすぐに、あなたが信頼に値する人間で、汚れない魂を持つ高貴で賢明な人間であることがわかりました』とってくれた。今回の彼女との会話は、これまで長い間なかった最高に満足できたものだった。この出会いが私の人生の新しい局面を開くだろう」⁽⁶⁾。

朝河の日記を読むと、彼が1917年の6月8日から11日の間にもハーヴァードのグレッチェンの別荘に滞在していることがわかる⁽⁷⁾。朝河の日記が残っている1925年までの時期については、日記のなかにグレッチェンについての言及があり、二人の交流が続いたことがわかる。しかし朝河はそれ以降1945年までの間の日記を残していないので (彼の日記は1911年から1925年の間と1945年から1948年の間のみが残っている)、1925年以降の20年間に二人がどのような交流をしたのかは残された書簡から知るしかない。

朝河とグレッチェンの文通の全体像は筆者が調べた限りでは以下のものである。まず日記には1915年から1925年と1945年から1948年の時期に両者が交わした書簡のうち重要なものの抜粋が書かれている。また福島県立図書館所蔵の「朝河貫一資料」の「朝河発信書簡 (欧文)」⁽⁸⁾のなかに、朝河がグレッチェンに出した書簡の控えが残されている。朝河は自分が出した書簡の控えを作成していたが、G.W. という宛名が書かれたグレッチェン宛の書簡の控えがそこに53通存在する (整理番号 D131-1~51, D134, D135)。また同じ福島県立図書館にはグレッチェンから朝河宛の書簡もある。グレッチェンの自筆書簡が8通あり (E439-1~8)、また、グレッチェンが朝河に宛てた書簡を朝河が自分の保管用にタイプで打ち直したのも6通ある (整理番号 E428-2~7)。

いずれにしても、朝河がグレッチェン宛に発信した書簡で福島県立図書館が収蔵するものはすべて朝河が控えとしてコピーを作成したものであり、朝河が出した書簡のオリジナルではない。当然のことだが、書簡の受け取り手のグレッチェンが書簡を返却しないかぎり、朝河が出したオリジナルの書簡が朝河の遺品には残るこ

(4) ポストンのウォレン家を描いた以下の書物にグレッチェンの経歴も言及されており参考にした。Martin Green, *The Mount Vernon Street Warrens. A Boston Story, 1860-1910*, New York 1989, pp.150-152.

(5) 1915年の日記は“Asakawa Papers,” Box 5, Folder 49にある。

(6) 1916年から1917年3月24日までの日記は“Asakawa Papers,” Box 5, Folder 50にある。

(7) 1917年3月25日から1919年11月23日までの日記は“Asakawa Papers,” Box 5, Folder 51にある。

(8) 「福島県立図書館所蔵・朝河貫一資料」の「朝河発信書簡 (欧文)」の目録を参照。なお同図書館の「朝河貫一資料」の目録は、これまでの目録 (1992年版) を全面的に改訂した版が福島県立図書館の以下のウェブサイトにて2018年5月より公開されている (ただし「朝河受信書簡 (欧文)」については2018年秋以降に公開予定)。https://www.library.fks.ed.jp/ippan/shiryoannai/asakawa.html

とはない。しかし、朝河がグレッチェンに出した書簡の一部は、すでに述べたようにグレッチェンの娘レイチェルの寄贈によりイエール大学のバイネッケ図書館にある「朝河発グレッチェン宛書簡集」のBox 1とBox 2に存在する。またそこには福島県立図書館にあるグレッチェン宛書簡の控えと一致する書簡も数多く見出すことができる（一致するものは付録の資料の表に整理番号を記載した）。以下では、このバイネッケ図書館にある書簡の内容について紹介したい。

3. イェール大学バイネッケ図書館所蔵「朝河発グレッチェン宛書簡」について

バイネッケ図書館の「朝河発グレッチェン宛書簡集」のBox 1とBox 2には、朝河が1935年から1948年までの間にグレッチェン宛に書いた手書き書簡が82通ある。そしてそれらの書簡の呼びかけは、すべてDear Friendあるいはそれに類似のVery dear Friendなどで始まり、グレッチェンの名前は言及されない。また手書き書簡を送った際に同時に送ったタイプ打ちの「公開書簡」（全部で50通余りあるが、それらはウィリアム・ウィルコックス、A.E. モーガン、G.G. クラークなどの友人宛の書簡を「公開書簡」にしたもの）および朝河の「大統領親書案」のカーボン複写版もそこには入っている。さらに、これらの手書き書簡、「公開書簡」、「大統領親書案」すべてを、改めて同一のタイプライターで打ち直した版も入れられている。この打ち直した版はおそらく朝河の死後に、グレッチェンが一つの読み物として書簡を読むことができるようにタイプで全体を打ち直したものである。そして、これらすべてが二つ折りのボール紙のなかに入れられ、表紙にはグレッチェンの手書きで“Writings and Letters of Dr. Asakawa of Yale”と書かれている。

さらに筆者が確認できた事実は、グレッチェンがタイプで打ち直した版のカーボン複写版つまりコピーが、イエール大学スターリング記念図書館のManuscripts and ArchivesにあるAsakawa PapersのBox 3に存在することである。おそらくグレッチェンが朝河の死後に、朝河から1935年以後に自分宛に来た書簡のうち重要なものとそれらに付随して送られた「公開書簡」、「大統領親書案」などをタイプで打ち直し、自分で保持するとともに、その際に作成したカーボン複写版をスターリング記念図書館のAsakawa Papersに寄贈したのではないと思われる。そのことに筆者が気づいた理由は、Asakawa Papersに所収されたDear Friendあるいは類似の呼びかけで始まる82通の書簡が、バイネッケ図書館にある「朝河発グレッチェン宛書簡」にあるタイプで打ち直した版と、その活字の形や活字のつぶれ方、字数、行数のフォーマットにおいてまったく同じだからである。Asakawa PapersのDear Friendあるいはそれと類似の呼びかけで始まる書簡（以下「Dear Friend宛書簡」と呼ぶ）には、朝河が第二次世界大戦の推移をどう見ていたか、また、朝河が日米開戦についてどのような考えを持っていたのか、戦時中にどのような研究をしていたかなど、朝河の戦争観や研究生活に関する多くのことがらが書かれているが、これまでその受け取り手がグレッチェン・ウォレンであることは知られていなかった。しかし受け取り手がグレッチェン・ウォレンであることはバイネッケ図書館にまったく同じタイプ打ちのものが存在する以上、紛れもない事実である。

4. 「Dear Friend 宛書簡」に関する我が国での研究

このAsakawa Papersにある「Dear Friend 宛書簡」がグレッチェン・ウォレン宛であることをこれまで明らかにした研究はないが、この書簡のうちの一部を分析した研究はすでにある。それは山内晴子氏の『朝河貫一論』の第4部第4節第2項の「1941年と1942年のDear Friend 宛書簡とCorrespondent's Enterprise」の部分であるが、そこではなぜか誤って「Dear Friend 宛書簡」の受信者がグレッチェン・ウォレンではなくラングドン・ウォーナーとされている。山内氏は、1942年7月19日付の「Dear Friend 宛書簡」での記述で「あなたのハーヴァード大学」という記述がみられることから、受信者がウォーナーだと推定しているが、以下、詳しく文脈をたどり、なぜグレッチェンがウォーナーと取り違えられたのか辿ってみたい。

朝河の1942年7月19日付の書簡では、最近の歴史学の博士論文における想像力の欠如について語られているが、山内氏は次のように翻訳する。「もう一つ大きな障害になっているものは、大学院生の学問的到達度と、人生における一般的な経験の双方で、未成熟なことにあります。あなたのハーヴァード大学において容易に証明されるかも知れないように、10年前に博士号を取得した若い学者たちには、比較的その危険はないかもし

れない」と。その上で山内氏は、ここで「あなたのハーヴァード大学」と書いてあることから、「Dear Friend がハーヴァード大学関係者であることが初めて分かった。従って、Dear Friend は、1923 年から 1951 年までハーヴァード大学フォッグ美術館長東洋部長で大学の美術講師も務めていたラングドン・ウォーナーであることは確実である」と結論する⁽⁹⁾。

しかしこの書簡の原文を読めば、「あなたのハーヴァード大学」という訳にはならない。この後半部の原文は、”The danger is only relatively less even with young scholars who have won their degrees a decade ago, as may be easily demonstrated in your Harvard correspondent.”であり⁽¹⁰⁾、筆者が訳せば「その危険は十年前に学位を取った若手の学者であれば相対的に少ない。そのことは、あなたのハーヴァードの文通相手を見れば容易に例示される」となる。「あなたのハーヴァードの文通相手 (your Harvard correspondent)」が誰なのかはわからないが、おそらくグレッチェンが文通していたハーヴァード大学関係の友人であろう。

また山内氏はこれに続き、1942 年 7 月 26 日付の「Dear Friend 宛書簡」で、朝河が言及する「あなたの文通者の企画 (your correspondent's enterprise)」という言葉が「ウォーナーの『書簡の企画』」と理解し、「ウォーナーの『書簡の企画 (your correspondent's enterprise)』」に朝河が参加することによって、国務省関係者がウォーナーを通して朝河の戦後構想をその後も共有できたと考える」とする⁽¹¹⁾。しかしこの文章は「あなたの文通者の企画」と読むべきであり、ここでの「あなた」もウォーナーでなくグレッチェンである。書簡の宛先がグレッチェンであるとすれば、当然、この部分の結論は再考する必要があるだろう。ただし筆者は、朝河の戦後構想の問題に関しては門外漢であるので、ここでは「Dear Friend 宛書簡」がグレッチェン宛書簡であるという事実を指摘するに留める⁽¹²⁾。

次にこの「朝河宛グレッチェン宛書簡」の内容を紹介することで、朝河が 1930 年代後半から 40 年代に、国際情勢や第二次世界大戦についてどのような分析を行ったのか、またこの時期にどのような研究を行っていたのかを解明するための予備作業としたい。

5. 朝河がグレッチェンに宛てた書簡の内容

バイネッケ図書館の「朝河宛グレッチェン宛書簡」に収められた、朝河がグレッチェンに宛てた書簡の全体像は付録の表の「1. 朝河がグレッチェン自身に宛てた書簡」にまとめた通りである。表では書簡の日付順に番号を振ったが、それは筆者が便宜的に付したもので、当然だが、もとの手書き書簡にもタイプ打ちの書簡にも番号はない（以下の本文では参照を容易にするため、書簡を引用する際に付録資料の番号を記載する。「1. 朝河がグレッチェン自身に宛てた書簡」の番号 1 は 1-1 のように、「2. グレッチェン宛書簡に同封して送られた『公開書簡』一覧」の番号 1 は 2-1 のように記載する）。また、福島県立図書館所蔵の「朝河貫一資料」に書簡の控えがあるものについては、表にその書簡番号も記載しておいた。ただし、福島県立図書館に 1935 年以降の日付のグレッチェン宛書簡の控えがあっても、その実物がバイネッケ図書館の「朝河宛グレッチェン宛書簡」に存在しないものがいくつかある。このことから、グレッチェンが朝河から来た書簡のすべてを保管していたわけではなく、破棄したものもかなりあることが推定される。いずれにしてもグレッチェンは、朝河から来た書簡のうち後世に残してもよいと判断したものだけを保管したのであろう。以下では、書簡の内容をいくつかのテーマに分けて簡単に紹介したい。

(1) ヒトラーのドイツへの批判

1935 年から 1940 年頃にかけての書簡では、ヨーロッパで台頭してきたヒトラーのドイツに対する批判が大

(9) 山内晴子『朝河貫一論—その学問形成と実践—』早稲田大学出版部、2010 年、516 頁。

(10) Asakawa Papers (Box 3, Folder 34) にある 1942 年 7 月 19 日付 Dear Friend 宛書簡 (カーボン複写版) の当該頁は 0030247 である。

(11) 山内『前掲書』、517 頁。

(12) また『朝河貫一資料・早稲田大学・福島県立図書館・イェール大学他所蔵』(研究シリーズ No.5、早稲田大学アジア太平洋センター、2015 年) でも「Dear Friend 宛書簡」がウォーナー宛の書簡と記されている (50-53 頁)。

きなテーマになっている。とくに1939年に第二次世界大戦が勃発した時期にはヒトラー批判が頻繁に論じられる。とくに朝河がヒトラーを批判する際、ドイツの中世以来の民族性とヒトラーの精神とを関連付けている点が興味深い。

1939年後半の書簡で（1939年7月12日〔番号1-10〕、1939年11月12日〔番号1-15〕、1939年11月26日〔番号1-16〕）、次のようにいわれる。ヒトラー支配下のドイツ人の精神構造は古代ゲルマン人のそれに近い。すなわち古代ゲルマンの世界では、共同体の構成員は自身が属する共同体に対して誠実を誓い、共同体に対し不誠実な人間は共同体により厳しく罰せられた。そこでは個人の自立的な行動は許されない。個人の名誉はあくまでも共同体への誠実により得られるものであった。そこでは共同体への忠誠が求められる一方、外に対しては戦いと略奪が許された。その後、ドイツに封建制に基づく騎士道の理念が西欧から到来しても、個人を重視する騎士的な誠実と名誉の理念はドイツには定着せず、誠実と名誉はあくまでもその人が属する集団に依存するものとして理解され続けた。1933年に権力を掌握して以降のヒトラーの行動様式は古いゲルマンの精神を反映しており、それがヒトラーの成功の秘密だとする。

しかし朝河の観察では、このようなナチスの支配もおそらくまもなく崩壊する（1940年6月25日〔番号1-24〕）。なぜなら、どの国民も自身が勝ち取ってきた独立を保持したいと願っているからである。とくに民主主義の国家ではすべての市民が独立を望むので、ナチスによる征服が大きくなればなるほど、それだけナチスの解体も早いだろう。またヒトラーの個人的な性格もある。ヒトラーは一定のドイツ人の特徴や情緒を体現しているとはいえ、彼がドイツ人の性格全体を代表しているわけではない。彼が体現するのは、きわめて歪んだ形での古いドイツ国民の特徴である。したがってヒトラーの支配はヒトラーとともに終わるだろう、と朝河は述べる。

さらにヒトラー批判と関連する論点として、民主主義についての議論がある（1940年7月7日〔番号1-25〕、1941年12月10日〔番号1-41〕）。朝河によれば、民主主義は最善の政体だが維持するのに最も困難な政体であり、民主主義の政体は、共同体の構成員がその維持の責任を放棄するとき墮落する。したがって、民主主義の政体では人々がつねにそれが崩壊しないように警戒し、自己反省を行わねばならない。しかし個人の責任感や義務感がなければ、民主主義の政体は不可避免的に病む。そうすると人々は、政体の病気を治癒するために様々な種類の近道を選ぶ。つまり、その結果として民主主義は、臆病な逃避として全体主義や共産主義の体制へと移行するのである。

(2) 日本人の国民性

ヒトラー批判と民主主義の擁護と並んで、朝河のグレッチェン宛書簡におけるもう一つの大きなテーマは日本人の国民性をめぐる考察である。グレッチェン宛書簡からは、朝河がいつ頃から日本人の国民性の研究を始めたのか、さらにその研究がどのように行われたのかについて詳細に見て取ることができる。

朝河は1942年の2月28日付の書簡〔番号1-44〕で、グレッチェンから日本人の国民的な習性とはどのようなものかと問われたが即座に明確な回答ができないので、最近、日本人の国民性の研究を始めたことを述べている。この書簡から、朝河が太平洋戦争の開戦直後の時期にグレッチェンからの求めにより、日本人の国民性の研究を始めたことがわかるが、とくに1942年から43年の前半にかけて、この研究を集中的に行ったことが書簡からは窺える⁽¹³⁾。しかし1943年6月頃には日々集中的に考察することを止め、その後は日曜日に限定して研究を継続している⁽¹⁴⁾。朝河が日本人の国民性の研究を集中的に行った時期のグレッチェン宛書簡では次のようなことがいわれる。1943年3月12日の書簡〔番号1-53〕では、自分が毎日、日本人の国民性について研究しているので、通常の研究や図書館の仕事が完全にできないしていると述べる。さらに、グレッチェン

(13) たとえば1943年1月14日のヘレン・ダンナム宛書簡で、自分が日本人の国民性についての研究を行っていることに言及している（『朝河貫一書簡集』、646-649頁）。

(14) 朝河はグレッチェンからだけでなく、ウィリアム・ウィルコックスからも日本人の心理についての考察を行ってほしいと1942年10月に依頼されていた。そのことは1942年12月27日付のウィルコックス宛書簡の文面からわかる。このウィルコックス宛書簡は「公開書簡」としてグレッチェンにも送られている（番号2-36）。

の問いに対する回答は一冊の本ほどのものになるだろうがいつ書き終えるかはわからないと語る。しかしその後 1943 年 6 月 6 日の書簡 [番号 1-54] では、グレッチェンから提起された日本人の国民性に関する問いと格闘した結果、不完全ではあるが 150 頁ほどの枚数の原稿を書いたこと、またその後、日本の学者の著作から多くのノートを取り、自身が取ったノートは現在 800 頁ほどに上ることを述べる。また、この仕事を日々 10 時間から 11 時間続けたので、2 月の終わり以降、自分の本来の研究は脇に追いやられ、それに付随する仕事も中断され、またノートを取ることに終わりの見えないので、今後この研究は日曜日のみに限定するといっている。

このような書簡の記述からは、朝河が 1943 年の 2 月から 6 月頃の時期に、自身の継続してきた本来の研究を止めて国民性の研究に没頭し、日本人の書いた国民性にかんする様々な著作を読み、膨大なノートを取っていたことがわかる。実際、書簡での記述と対応するノートがイェール大学のスターリング記念図書館の Asakawa Papers には存在する。それらはこの時期の日付が入った、「妥協と理性」に関するノート、「国家と個人」に関するノート、「神道」に関するノートなどである⁽¹⁵⁾。それらのノートは日本人が書いた国民性に関する著作からの抜粋であったり、切り抜いた新聞記事への注釈であったりするが、それらが、朝河がその後の書簡でしばしば言及する日本人の国民性論の典拠となったと思われる。

(3) 封建制研究の継続

朝河はこのように 1942 年初めにグレッチェンの求めで日本人の国民性の研究を始め、1943 年の前半にそれに没頭するが全体の議論をまとめる見通しがつかず、再び、継続してきた本来の歴史研究に自身の主力を向けるようになる。では、朝河がこの時期に行っていた本来の歴史研究は何だったのだろうか。それはグレッチェン宛の書簡から見るかぎり、朝河が『入来文書』のなかで出版を予告していた「南九州の封建体制」の研究であったと思われる。なぜなら、朝河は 1943 年の 7 月 1 日の書簡 [番号 1-58] で自身の本来の仕事に戻ったことを述べるとともに、その仕事について次のように語っているからである。すなわち、それは 1907 年に史料収集を始めた研究で、自分はそのために数千の文書史料や文書以外の史料を所持している。またその研究は、比較史的視点に立った制度史研究であるので、幅広い視野からの分析、集中的な思考、抑制された想像力を要求する。それは一生涯の仕事として十分過ぎるものであり、自分が百年生きれば完成できるようなものだ、と。

また朝河の封建制研究に関していえば、彼が 1932 年頃から 1940 年頃まで書き続けていた「封建社会の性質」草稿群についてグレッチェン宛書簡で言及していることが重要である。「封建社会の性質」草稿群は、日欧の封建制を比較し、封建制の類型論を構築しようとする野心的な試みであったが、朝河は 1940 年頃にこの研究を中断し草稿群のまま放置していたものである⁽¹⁶⁾。だがグレッチェン宛の 1947 年 8 月 24 日の書簡 [番号 1-79] では、かつて書いていた「封建社会の性質」の草稿に手を入れて、ドナルド・キーンから依頼された角田柳作記念論文集に寄稿する予定であることが述べられる。1948 年 1 月 4 日の書簡 [番号 1-81] では、なおそれを完成させようと努力していると語るが、角田柳作記念論文集自体が刊行されず終わったので、朝河のこの論文も完成には至らなかったものと思われる。

6. グレッチェン宛書簡とともに送付された「公開書簡」について

以上、グレッチェン宛書簡の主要な話題について簡単に紹介したが、朝河はグレッチェンに書簡を送る際に、自身の友人たちに宛てた書簡をタイプ打ちの「公開書簡」としたものも同封して送っていた。それらは「朝河発グレッチェン宛書簡」の Box 1 と Box 2 のなかに 50 通余り存在する。その詳細は、本稿の付録資料の「2. グレッチェン宛書簡に同封して送られた『公開書簡』の一覧」にまとめたが、グレッチェンに送った「公開書簡」としては、村田勤宛、井上秀宛、鳩山一郎宛、ウィリアム・ウィルコックス宛、G.G. クラーク宛、A.E. モー

(15) Box 47, Folder 203 “Notes-Compromise and reason”, Box 49, Folder 219 “Notes-Nation and individuals”, Box 49, Folder 220 “Notes-Nation and natural religion”.

(16) 「封建社会の性質」草稿群については参照、甚野尚志「朝河貫一と日欧比較封建制論—『朝河ペーパーズ』の「封建社会の性質」草稿群の分析—」(海老澤衷・近藤成一・甚野尚志編『朝河貫一と日欧中世史研究』吉川弘文館、2017 年、2-40 頁)。

ガン宛など様々な人物に宛てられたものがある。またグレッチェンには「大統領親書案」のカーボン複写版も送付しているため、彼女は朝河にとり非常に親密な友人であったことがよくわかる。

グレッチェンに送られた「公開書簡」が扱うテーマは、主として第二次世界大戦でのドイツやロシアの問題、日本の問題、戦争の推移と自由主義、民主主義の問題などであり、とくにウィリアム・ウィルコックス宛書簡では日本での天皇制の意義について語る書簡があり興味深い（1942年2月22日 [番号2-17]）。また、アメリカの対日占領政策に関わる内容のものとして、ラングドン・ウォーナー宛の書簡がある（1942年11月22日 [番号2-31]）。そこでは、ウォーナーから日本占領後の派遣部隊で日系二世を積極的に登用する案が提示されたことに対して、朝河は明確にそのような案はよくないことを述べ、日系二世よりも他の一般のアメリカ人の方がよいと答えている。ここからは、ウォーナーの周辺で占領政策に関する何らかの検討があり、朝河が参考意見を求める者として重視されていたことがわかる。

またもうひとつ、アメリカの対日占領政策に関する「公開書簡」としては、エルドン・グリフィン宛書簡がある（1944年2月22日 [番号2-40]）。そこでは、グリフィンがシカゴのCATS（米陸軍省の民政訓練学校）⁽¹⁷⁾のエガン（Eggan）大尉に対し朝河の金子宛の英訳書簡を見せた結果、彼がその書簡をCATSでの教材に使いたいと申し出たので、朝河の名前は匿名にしてそれを使わせてほしいという書簡をグリフィンが朝河のもとによこしたことへの返事である。朝河の書簡の内容は、使用するのであれば匿名かつ全文を引用するようにしてほしいという要求である。都合のよい箇所だけを抜粋することでこの書簡を書いた経緯を誤解されたくないということが述べられる。ここから、朝河が送った「公開書簡」はCATSで教材として利用されていたことがわかるが、一方で朝河は、自分の思想が歪曲して伝えられることを極度に警戒していた。そこに朝河の日本人としての独立的な立場を見ることもできよう。

おわりに

朝河がグレッチェン自身に宛てた82通の書簡には、第二次世界大戦や日本人の国民性の問題以外に、仏教、キリスト教、中世哲学などの宗教や哲学に関する話題が多くある。朝河が晩年の文通のなかでは、グレッチェン宛書簡はその書簡の数だけでなく、その高度に知的な内容と日常生活の私的な内容が入り混じっている点で際立っている。グレッチェンが朝河にとり、晩年の最大の友人であったことは、彼女が書簡で朝河のことを「世界で最も偉大な魂と精神の持ち主の一人」（48年1月1日の日記）と書いたとか、「この惑星で最も純粋な魂の持ち主」（48年4月11日の日記）と書いたとかを自身の日記に書き残していることからわかる⁽¹⁸⁾。

このようにグレッチェンは朝河にとり特別な文通相手であったが、グレッチェンから朝河に送られた書簡のオリジナルはほとんど残っていない。福島県立図書館にグレッチェン自筆の書簡が8通、朝河による書簡の控えが6通だけ残るのみである。しかし朝河は、グレッチェンから来た書簡の集成を生前に作成していた。1946年2月3日のグレッチェン宛書簡で次のように述べている。「私はあなたからの書簡を読み返しています。文通は1915年に始まっています。書簡を読みながら、あなたが30年以上、私に示してきた配慮に感動しています。私がどうしてこのようなあなたの接し方に値したのかわかりません。私の方ではあなたへの尊敬の念がますます高まり、あなたが深く私の精神に影響を与えてきました。私の精神の本質の一部は、あなたが作ったといってもよいのです。私は、あなたから来た書簡の集成を少し前に完成させたところです」と。

つまり朝河は折に触れて読み返してきたグレッチェンの書簡を、自身で写し直し（おそらくタイプで）まとめる作業を行っていたことがわかる。だが、この集成は朝河の遺品には存在しない。グレッチェンからの書簡はどうみても全体で数百通はあったはずである。しかし先ほども触れたように、福島県立図書館にはオリジナルが8通、控えが6通しかない。ということは、朝河はこの集成を生前に破棄したと思われる。したがって両者の文通の全体像を完全に復元するのは難しい。

(17) CATS（米陸軍省の民政訓練学校）はCivil Affairs Training Schoolの略で1943年にアメリカで創設され、占領地の事情や語学の教育を行った米陸軍省の民政訓練学校のことである。ハーヴァード、イェール、ミシガン、シカゴなどの各大学に置かれた。

(18) Box 6, Folder 56. このフォルダには1946年11月25日から1948年8月8日までの日記がある。

だが、ここで紹介したバイネッケ図書館の「朝河発グレッチェン宛書簡集」の内容からだけでも、第二次世界大戦中の朝河の思想について、これまでの研究で欠落していた部分を埋めるのに十分な情報量がある。その意味で「朝河発グレッチェン宛書簡集」の価値はきわめて高い。とくにグレッチェンは日米開戦前から戦後の時代まで朝河と最も親密に書簡を交換していた友人であり、今後これらの書簡の分析が進めば、朝河が第二次世界大戦をどう見ていたか、戦後日本のあるべき姿についてどう構想していたのかといった問題について様々な手がかりを得ることができるのではないだろうか。

【付記】 本稿は、早稲田大学文学学術院の私立大学戦略的研究基盤形成事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏—東アジアにおける人文学の危機と再生—」のプロジェクトの一環として、筆者が2017年3月にイェール大学バイネッケ図書館およびスターリング記念図書館で行った朝河貫一関係資料の調査の成果である。内容の一部は、この私立大学戦略的研究基盤形成事業主催のワークショップ「朝河貫一の教育活動」(2017年7月15日、早稲田大学戸山キャンパス)で報告している。

資料：イエール大学バイネッケ図書館所蔵「朝河発グレッチェン宛書簡集」一覧表

出典：“Gretchen Warren Letters from Kan’ichi Asakawa and Related Papers,” Box 1, 2. Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University

*以下の書簡はすべて Sterling Memorial Library, Manuscripts and Archives, “Asakawa Papers,” Box 3 に同一のもの（カーボン複写版）がある。

*番号は筆者が入れたもの。オリジナルには番号は付けられていない。

*朝河による書簡の控えが「福島県立図書館所蔵・朝河貫一資料」にある場合はその書簡番号を入れた。

1. 朝河がグレッチェン自身に宛てた書簡一覧

番号	日付と呼びかけ	内 容	テーマ	福島県立図書館
1	1935年12月2日 My dear friend	祈りは信仰の事柄ではなく人生の感覚の自然の表現である。死後の生命を考えたことはない。生命は決して終わらないという感覚のもとで生きてきた。	信仰と祈り	
2	1936年4月26日 Dear Friend	中世アカデミーへの言及。ヨーロッパと日本の制度を比較することがいかに価値があるか。すべての制度は、普遍性と個性が反響しあってできた事物である。	制度史研究の意義	
3	1936年11月29日 Dear Friend	ボストン美術館での日本芸術の展覧会に二度行った。ラングドン・ウォーカーが書いた日本彫刻の新しい本を見たか。私は、魂が肉体を超えて生き残るのかのかどうかには関心がない。	霊魂不滅の問題	
4	1937年11月28日 Very dear Friend	リルケの本を送ってくれたことに感謝する。私が長い間文学を読まずにいた。制度史が自分のすべての時間を占めてきた。ある時期はゲーテを読んだが、彼は特別な詩人である。	制度史研究への没頭	
5	1938年3月13日 My dear friend	ヒトラーの我が闘争はドイツの運命のミニチュアである。ドイツは劣等感の犠牲になった。それに大きな悪意と好戦性が加わった。	ヒトラーについて	
6	1938年4月8日 Dear Friend	仏教の教えがキリスト教よりも霊的な強さを与えてくれると感じる。	仏教について	D131-1, D131-7
7	1938年11月20日 My dear Friend	あなたが現在、私が深い思想の交流をできる唯一の友人だ。他の人たちは現実的で外面的なつながりでしかない。民族の精神に深く根付いた習性は、ドイツ人の場合のように払拭できない。	グレッチェンとの友情	
8	1939年4月19日 Dear Friend	民主主義は個々の市民の精神的な価値による。その組織の強さではなく、個々のメンバーの強さによる。市民の精神的力が弱まれば民主主義は統治の最も弱い創造物となる。	民主主義と個人の精神	
9	1939年5月23日 My very dear friend	名誉と忠誠の感覚は中世のイングランド、フランスの遺産である。イタリア、ドイツのものではない。	名誉と忠誠の感覚	D135
10	1939年7月12日 My great friend	禅の方法は魂を自由にし、普遍化してその個性に魂を戻させる。今、14世紀のベルトラン・ド・ゲスランを読んでいる。そこには百年戦争期のフランスとイングランドの個人的な名誉と忠誠の感覚が見出される。ドイツ人は騎士道とは違う忠誠と誠実の感覚を中世からもつ。ヒトラーの我が闘争は、中世の騎士よりも古代のゲルマン人に近い。	忠誠と名誉の感覚の英仏と独の違い	
11	1939年9月3日 My fellow Traveller	私は今、東西文明の間で生じている出来事を追っている。イギリスか日本の指導者になり事件を指導できたら、またヒトラーの側近になって彼の心を変えられたらと思う。	戦争への憂慮	D131-4
12	1939年9月10日 (11と同時に送付、呼び掛けなし)	ドイツ人やヒトラーには民主主義を信奉する人々を理解するのは困難だろう。ヒトラーが作った体制が崩壊すればヨーロッパ全体にとり災厄になる。連合国はドイツをすぐに新体制に移行させるべきだ。	ヒトラーのヨーロッパ支配への憂慮	
13	1939年9月20日 Very dear friend	ロシア人はヨーロッパの封建制的・騎士的な規律を経験しなかった。ロシア人は近代民主主義の市民道徳を持たず、イギリス人やフランス人が持つような名誉の理念も民主主義の精神も持たない。ロシアはナチスより大きな問題になるだろう。	封建制を経験しなかったロシアに民主主義はない	

14	1939年11月5日 Dear Friend	人類と文明は不死であり欠陥はあるが進歩すると確信する。ロシアの体制がすぐに変化しなければ、一次的な退歩が戦後にあるかもしれない。これはヒトラーの問題よりも困難な問題である。	ロシアの脅威	D131-5
15	1939年11月12日 Dear Friend	英独仏で名誉感覚が異なる。ドイツの部族は長い間、自由人の共同体で生きてきた。組織的な国家生活を経験しない。グループのメンバーの誠実に依存する。不誠実な人間は共同体により処罰され、名誉感覚は誠実に依拠する。封建制と騎士道が到来しても個人の内在的価値にならない。	ドイツ人はグループ内で誠実	D131-7
16	1939年11月26日 Dear Friend	ヒトラーは権力の座に就いて以来、原始時代に逆行している。ゲルマンの共同体の純粋な形態、古いゲルマンの思考方法に戻っている。劣等感と攻撃性を持ち、グループ志向の生活を目指している。	ヒトラーは古ゲルマンに戻っている	D131-6
17	1939年12月3日 Dear Friend	スターリンは人間の言語を話していない。ドイツ人とも違う。西欧世界は彼を理解できないだろう。ロシアはローマ法や騎士道の影響を受けなかった。次の時代にヒトラーよりも悪い影を落とすだろう。	スターリン批判	D131-8
18	1939年12月6日 Dear Friend	朝河が自身で所有するドイツ騎士団関係の図書のうち、グレッチェンが関心を持ちそうな書名を挙げている。	ドイツ騎士団関係の書物	
19	1939年12月17日 Dear Friend	上記の図書のうち、グレッチェンが関心をもった書物を送ると述べる。	ドイツ騎士団関係の書物	
20	1940年2月25日 Very dear Friend	この3週間以上、西洋中世史の演習のクラスの授業準備で忙しかった。私は戦争が始まって諸国民の歴史的に形成された道徳的特徴に関心を持つようになった。この点でそれぞれの民族には大きな相違がある。	諸国民の異なる道徳的な特徴	
21	1940年4月27日 Dear Friend	様々な蝶を描いた画集を見て、蝶の特徴を比較していると述べる。	蝶の絵について	
22	1940年5月12日 Dear Friend	自然の様々な形態、すなわち、木々、木の葉、魚や鳥の動きに惹かれる。雲や光と影の動き、木や草への風、天候の移り変わりなどに美がある。	自然の美について	D131-9
23	1940年6月23日 Dear Friend	連合国軍の正義は道徳的に正しいだけでなく、歴史的にも正しい。中世の英仏関係に今日の問題との類似を見ることが出来る。ノルマンディー公がイングランドを征服したがなおフランス王の家臣という反・歴史的な状況が作られた。しかし西欧の続く歴史は国民国家の統一へ向かった。	連合国側に正義がある	D131-11
24	1940年6月25日 Dear Friend	ヒトラーの政策は成功しないだろう。どの国民も独立の保持を願っている。ナチスの拡大は確実に抵抗を受ける。またヒトラーが具現するのは歪んだ形での国民感情である。イギリスが人類の自由、国家の独立、キリスト教文明のチャンピオンである。人間性がイギリスを通じて勝利するだろう。	ヒトラーは確実に敗北する	D131-12
25	1940年7月7日 Dear Friend	民主主義は最も困難な政体である。なぜなら、それはつねに警戒し自己吟味しなければならないからだ。民主主義とは市民の自己統治であり、市民は自由である場合にのみ統治しうる。それが適切に機能しないと民主主義は病み、個人の責任が義務を放棄し、臆病な逃避として全体主義や共産主義に訴える。	民主主義が最も困難な政体である	D131-13
26	1940年7月21日 Dear Friend	最近刊行された Ramsey Muir の “Civilisation and Liberty” には、ギリシア人の文明への貢献について示唆的な考えが述べられている。	最近の読書について	
27	1940年7月23日 Dear Friend	コルヴァイ修道院のウィドキンドは、ハインリヒ1世とオットー1世の統治についての有名な記述を残している。ウィドキンドによる955年のレヒフェルトの戦いに関する記述にはオットー1世がこの戦いの前に行った演説が書かれている。それは現在のイギリスで行われる演説と似ている。	ウィドキンドが書いたオットー1世の演説と現在のイギリスでの演説との類似	

28	1940年8月5日 Dear Friend	送ってくれた Manchester Gaudian の記事は素晴らしい。イギリス人の自己批判はつねに新鮮だ。今はすべての民主主義がその深さを追求すべき時代だ。イギリスはおそらく他よりも完全に民主主義を守るだろう。	イギリスの民主主義の卓越性	
29	1940年8月26日 Dear Friend	明日プリマスに到着し、そこで約3週間過ごす。汽車の中でラシーヌの“Athalie”を初めて読んだ。フランスの偉大さはどこに行ったのか。ヴィシーやパリから来るニュースからは第三共和制が戦争前にすでに崩壊していたと感じさせる。	フランス第三共和制の弱さ	
30	1940年10月27日 Dear Friend	昨年12月にニューヨークでヨーロッパの騎士道について講演をした。これまでの発言から、日本では自分の名前がブラックリストに載っているはずだ。	ニューヨークでの講演	D131-14
31	1940年11月7日 Dear Friend	ニューヨークでの騎士道の講演は日本語で行った。それは自分が取ってきた膨大なノートに基づいている。	ニューヨークでの講演	D131-15
32	1940年12月12日 Dear Friend	最近ジャック・マルタンの講演を聞いた。彼の講演には多くの聴衆が集まった。だが彼の鉄のようなカトリックの論理に失望した。ノルウェーの人々がナチスの支配に服さないのは、サガに描かれた彼らの先祖の行動を思い出させる。	ジャック・マルタンの講演	
33	1940年12月18日 (呼びかけなし)	あるフランス人が民主主義の悪を治癒する唯一の方法として全体主義を唱えている。だが全体主義が力で課されれば民衆の質を悪くする。国家の最終的目標は個々の人格の改善にある。	全体主義の悪	
34	1941年4月20日 Dear friend	最近、Steward Edward White の“The Unobstructed Universe”を読んだ。もしあなたに関心があれば一冊注文してもよい。	最近の読書について	D131-18
35	1941年5月8日 Dear Friend	ヒトラーは民主主義が長い間経験したことのない教育者である。その教訓は大きくその代償は恐るべきものである。歴史的な類似例としてはゲルマン民族の移動とローマ帝国の崩壊に続く社会の解体のみが考えられる。その後千年続く国民国家の出現までのドラマがあった。	ヒトラーにより被る代償は恐るべきものとなる	D131-19
36	1941年5月11日 Dear Friend	リンドバーグはドイツ的な忠誠に忠実である。彼は自分が良き予言者であるとうぬぼれている。彼はアメリカの民主主義は揺らいでいると叫んでいるが、それは自身の思い込みで囚われているからだ。我々にとり良い教訓となる。	親ナチ的なリンドバーグへの批判	
37	1941年5月18日 Dear Friend	私の東京の友人は、私の書簡を別の友人を介し近衛首相にたびたび見せていると叫んでいる。近衛首相は軍部に身を委ねているところもあるが、フェアでバランスが取れている。彼は全体主義と自由主義の間で舵を取るという不可能な仕事を行っている。私は私の考えに対し近衛がどのように反応しているのか知るすべもないが、近衛は180度の方向転換をできる立場がなく、私も書簡の成果を期待しない。現在、災厄の危険があると知らせたいのみだ。	朝河の書簡が近衛首相にも回覧された	
38	1941年6月11日 Dear Friend	来週の土曜日から1週間、卒業式から逃れるため旅に出る。もしここにいれば行列の儀礼を行い、壇上に座らねばならない。何年も参加してきたので今年は休む。私はずっと日曜日も含め毎日10-11時間研究をしてきたので疲れている。	日曜も含め毎日10-11時間の仕事をする	
39	1941年7月20日 Dear Friend	東京での新内閣は1934年以降の政府が作り出してきた危機に対し、少し覚醒したことと表れであろう。しかし危機の原因を調査する勇気は欠いている。二人の枢密院顧問官が私の東京の友人に対し、私の書簡を読んで十分に危機を意識していると伝えてきた。天皇も危機を意識している。だが事態の突然の好転は期待できない。	日本での新内閣の成立、枢密顧問官が朝河の書簡を読んでいる	
40	1941年12月7日 Dear Friend	大統領が天皇に対して何らかのメッセージを送ったことを知った。だがそのメッセージは私が望んだものとは違うものだと言明する。それは洞察や共感を伴ったものではなく、その場限りの問題を扱う書簡と推察する。それは受け取り手と日本の民衆の不安や恐怖に配慮する書簡ではないだろうと思う。私が書いた大統領親書草案をこの書簡に同封する。	朝河自身が作成した「天皇宛大統領親書草案」の送付	D131-24

41	1941年12月10日 (呼びかけなし)	民主主義は最善のものだが、それを維持するのに最も困難な政体であることが最近の展開で証明された。民主主義はその長所から多くの国家が採用したが、その困難な性格により、しばしば崩壊した。受け身の大眾が安易で原始的な道へと強いられ、国家権力を強めようとする指導者が出るときに崩壊する。	民主主義の崩壊について	D131-25
42	1941年12月19日 Dear Friend	12月15日の大統領の議会へのメッセージはアメリカと日本の歴史をたどっているが、この文書の著者にはまったく想像力がない。諸国民の精神と行為を支配している深いものが見出されない。	大統領の議会での演説	D131-26
43	1941年12月26日 Dear Friend	友人への長い書簡を書き始めた。そのテーマの一つは歴史研究における想像力の問題であり、もう一つは日本文化がエゴイズムを超える政治的理想を生み出すことが可能か、という問いである。	歴史研究での想像力	
44	1942年2月28日 Dear Friend	あなたが発した日本人の精神的習性についての問いに明確な言葉で答えることができない。個人の生活や国家文明のすべてにとり教育が決定的である。	日本人の精神的習性についての問い	
45	1942年5月3日 Dear Friend	現在考えているのは一つは歴史学において想像力はどのような地位を占めるか、もう一つは戦後西欧の再構築の原則は何か、という問題である。だがもう一つ、自分を捉える大きな主題がある。それは日本人の歴史的習性であり、そのいくつかの側面を素描したが、これは終わりの見えない作業である。	日本人の歴史的心性の研究	D131-28
46	1942年6月10日 To G.O.W. from a friend	自由主義の最終的信頼は市民の自己に対する責任である。その基礎は子供の宗教教育にある。自分は今、法や叙述史料に基づき、日本民族の内面生活を再構築しようと努めている。	日本人の内面生活の研究 (G.O.W. はグレッチェン(Gretchen Osgood Warren)の名前)	D131-29
47	1942年7月12日 Dear Friend	4日半がかりで大学院棟の9階に転居した。隣人は古くからの同僚ばかりだ。私が寄贈した書物はすべて図書館の最上階フロアにある。その場所に私は仕事の場所を与えられた。そこで自由に寄贈した書物を使うことができる。	大学院棟への転居	
48	1942年7月19日 Dear Friend	現在の多くの博士論文は想像力を欠いている。その理由の一つは数十年來、歴史学の学生がドイツのアカデミズムのモデルの影響下で教えられてきたからだ。19世紀後半以降、客観性と正確さを求めてきたが自由で大胆な思考を犠牲にしてきた。もう一つには我々の大学院生が知的にも一般的な経験でも未成熟だからである。学生の想像力の陶冶が必要である。	歴史研究での想像力の必要性	D131-30
49	1942年7月26日 Dear Friend	プロパガンダは想像力を用いた解釈のうちで最も傲慢なものである。	プロパガンダについて	D131-31
50	1942年11月29日 Dear Friend	キリストの贖罪について人々に説教するのはローマ教会が行うプロパガンダだ。	プロパガンダについて	D131-33
51	1943年2月7日 Dear Friend	Aysellotte は元気になっているか。	知り合いの安否を問う	
52	1943年2月14日 Dear Friend	外交や行政のためにも歴史学の教育は活性化されるべきだ。歴史学が人文学のうちで最も重要な科目だと思う。	歴史学の重要性	
53	1943年3月12日 Dear Friend	私は日々、あなたの日本についての問いの答えを書いている。それは多くの考察と他の国民との比較が必要なものである。このために私の通常の研究が脇に置かれている。私の図書館の仕事は放置されている。私の答えは一冊の本になるほど長い。いつ書き終えるかわからない。	日本人の習性についての研究	D131-35

54	1943年6月6日 Dear Friend	あなたからの日本人の特徴についての問いに格闘している。そのため緊急のこと以外は誰にも書簡を書くことができない。これは予想よりも長い書物になった。何度かの日曜を使い150頁ぐらいの枚数になった。その後、そのテーマについて現在の日本の学者が書いたものを読み多くのノートを取った。自信が取ったノートは800頁以上に上る。これを2月終わりから日々10～11時間続けた。その間、全精力を注いでやってきた本来の仕事は脇に追いやられた。ノートを取ることの終わりは見えない。これからは日曜日限定する。あなたへの問いの答えは数か月では終わらないだろう。だが多くの自己の問い発見、思考の方向性も得ることができた。	日本人の習性についての研究	D131-36
55	1943年6月20日 Dear Friend	数か月間、私の存在根拠となる義務の仕事を投げやりにしてきた。あなたは私に問いを繰り返し、答えを要求するので、その問いが私を拘束している。それは、長い歴史の具現としての国家的な人間の性格からのみ扱いうる。国民の経験は、他の国民の生活との比較による外には正しい視角で把握されない。私はこの仕事を同じペースで今月の残りの時期も行うが、その後はときどき日曜日を使い、数か月続けるが、数年続けるということはないだろう。	本来の仕事を脇に置き、日本人の国民性の研究を行う	D131-37
56	1943年6月26日 Dear Friend	私はこの半年間、自分の義務をなおざりにして、あなたの問いに答える仕事をしてきたが、あなたはまだ不平を言い挑発する。あなたは日本の哲学に敵への赦し、敵への憎悪や復讐の禁止はあるのかと問う。あなたは中国、インドの哲学は赦しを含み、日本の哲学は好戦的だと考えている。	日本人の国民性は好戦的なのか	D131-38
57	1943年6月30日 Dear Friend	この木曜日に長らく離れていた本来の研究に戻った。今後は日本人の国民性については、日曜日のみ手探りで進みながらやろうと思う。それは長い旅で目的地もうす暗い。私はこれを公的な目的で行うのではなく、あなたの問いに対して明確な回答を求めたいから行うのである。	本来の研究に戻る	D131-39
58	1943年7月1日 Dear Friend	私は日本人の国民性の研究から本来の研究へと戻った。それは1907年に収集を始めた資料に関する研究で、その趣旨は1919年にイエール大学出版会とイエールの歴史学部により公表された。その成果は内外の学者に期待されている。私はそのために数千の文書を持っている。その研究は制度史で比較史である。ゆえに広範な研究、集中的な思考、抑制された想像力を要する。一生の仕事としても十分に厳しい。私が百年生きれば完成できるようなものだ。	自身の本来の研究	D131-40
59	1943年11月28日 Dear Friend	あなたの論文“Art, Nature and Education”をこれから熟読したい。あなたが書いた東洋の理想の混乱についての論文では、個人が国家の構成員である前に共通の人間であることが忘れられていると思う。	グレッチェンの論文へのコメント	D131-42
60	1944年2月13日 Dear Friend	私が書簡で書いた歴史学での想像力の議論について、友人がその内容を歴史学の雑誌に公刊することを勧めてくれた。	歴史学における想像力の論考について	
61	1944年2月20日 Dear Friend	雑誌 Britain を見たか。2月号に戦前の東京にいた最後の外交官 Sir Craigie の論文が掲載されている。それは Grew や Hull らのアメリカ人とは違う見方であり、そこにイギリス人とアメリカ人の心性の相違が例示されている。	イギリス人とアメリカ人の心性の相違	
62	1944年3月5日 Dear Friend	制度史研究では想像力が絶対的に必要である。制度分析では自己抑制、集中力、想像力が求められる。『日本の禍機』は私が若い頃に自身の内的な衝動に従い書いた著作で伊藤博文が1909年に暗殺された際持っていた。現在の私は自分を客観的な歴史研究の中に隠すことを望む。	制度史研究に不可欠な想像力	D131-43
63	1944年9月3日 Dear Friend	我々の教育はこの数十年間、人間教育を怠ってきた。現在の語学教育の方法や軍隊や官吏の職業指導は思考停止を強化している。教育は盲目的に情報を与えるだけのものになっている。	人間教育の必要性	D131-44

64	1945年4月5日 Dear Friend	私はつねに精力的に仕事をしてきたが、今はもっと集中的に研究している。その理由は私の企てが広範囲に渡る難しいものであり、また現在すべての時間時間を研究に向けることができ、かつ私に残された時間が短いことによる。	研究への集中	D131-45
65	1945年6月2日 Dear Friend	アメリカ人、イギリス人、スコットランド人、フランス人、ロシア人、ドイツ人と各民族の行動は歴史を通じて研究されるべき魅力的な主題である。この数か月、外国人が日本に到来してから1945年のカストロフィーに至る時代までの日本の政治を注意深く検討している。	異なる民族の行動分析は研究の対象となる	
66	1945年6月3日 Dear Friend	あなたに私の友人の社会学者A.G.Kellerの書簡を送る。ここでは社会学者が民主主義をどのように扱うのかを知ることができる。	社会学者による民主主義の考察	
67	1945年11月4日 Dear Friend	あなたにプリマスから持ち帰った松の木を送る。虫食い跡に自然のパターンを見ることができる。その背後に宇宙の知恵と力がある。	松の木の虫食いについて	D131-47
68	1945年11月27日 Dear Friend	コプト教の著作の抜粋に感謝する。キリスト教を受容した後もそれ以前の異教を残す例は他にもある。私はメロヴィング朝の史料を読んだときにしばしば同様の現象に驚いた。初期中世のゲルマン人、スラヴ人の改宗者にも同様のことがいえるだろう。	キリスト教化後の異教の残存	D131-50
69	1946年2月3日 Dear Friend	最近あなたから来た書簡を読み直している。それは1915年に始まる。我々の交流は二、三度小さな嵐に見舞われたがあなたが私に30年以上示してくれた敬意に深く感謝する。あなたへの尊敬の念が増しあなたからの書簡集成を最近完成させた。ダイアナとの文通はあなた以前に始まったが約20年前に終わった。	グレッチェンからの書簡集成の完成 (タイプ打ちの版では日付が誤って1945年2月3日になっている)	
70	1946年11月17日 Dear Friend	私は8月にニュー・ハンプシャーの行きつけのホテルに行かなかった。コックがいなくなったからだ。その代わりヴァーモント州南部のホテルに行き新しい経験をした。私の心を占めているのはロシアの政治的心性である。それが書けるようになったら送りたい。	避暑地をヴァーモントに変える	
71	日付無し Dear Friend	仏陀の教えでは、個人が自身の再生の因果をなくし、次の輪廻のための因果を付け加えないことが重要である。人間の生の目的は完全な自己の消滅により、輪廻転生の鎖から解放されることである。	仏教の救済の教え	
72	1947年3月18日 Dear Friend	私はペリーについて研究したことがある。彼の言葉の多くは恣意的なものだ。西洋諸国はペリーと同じ精神で日本に対し接してきた。日本はこのような侮蔑を無視し、西洋からの刺激に感謝しつつ自国の秩序形成に努めた。日本には、自己変革と侮蔑への長い忍耐があったことを西洋は理解していない。その結果軍部は外国の傲慢さに怒り1930年代以降、攻撃的政策を取り始めた。	日本の自己変革と西洋の侮蔑に対する忍耐	
73	1947年4月15日 Dear Friend	英語の文章にコメントをお願いする。英語表現を改善したい。改善の後、公刊の可能性を考えている。	英文添削のお願い	D131-48
74	1947年4月24日 Dear Friend	ユダヤ人の苦境には誰もが同情する。だがユダヤ人が故郷に帰るとい議論は人を納得させない。古代にヘブライ人が到来する前、パレスチナに民族はいなかったのか。唯一の解決はユダヤ人が人の住まなかった場所、つまりアフリカ内部、アンデス、アラスカとかに住むことだ。	ユダヤ人問題	
75	1947年6月15日 Dear Friend	あらゆる自然の神秘に私は魅了される。太陽、空気、雨、土が調和的に動いている。食事の際にこうした宇宙の協働を思い瞑想している。	自然世界のなかの調和	
76	1947年7月13日 Dear Friend	私のロシアに関する論文の英語を直してくれるというあなたの提案に深く感謝するが、現在その必要はない。というのはロシアと西欧の状況が新しい段階になり、私が語ったことが古くなり私自身の考えも違ってきているからだ。	ロシアについての論文を書き直す	D131-57

77	1947年7月20日 Dear Friend	私はボエティウスを読み多くの刺激的なラテン語の文章を書いたことがある。彼のキリスト教を理解しようとする姿勢に感動した。	ボエティウスについて	
78	1947年8月3日 Dear Friend	我々が近いうちにロシアと戦争をするだろうか、というあなたの問いに適切に答えることはできない。将来そのようなことが起こるかどうかは、ロシアにかかっている。私は自身のロシアについての長い書簡に満足していない。まだロシアの意識をよく理解できていない。	ロシアについての論文はまだ満足いかない	
79	1947年8月24日 Dear Friend	私は以前に書きしばしば手を入れてきた封建社会の性質のエッセーを書き直している。それは友人の記念論集に寄稿するためだ。このエッセーには史料を挙げていないが西欧と日本の封建体制の比較の多くの論点を含んでいる。今の仕事はこれを可能な限り簡潔にして正確で読みやすくすることだ。	角田柳作記念論集のために「封建社会の性質」を改稿する	
80	1947年10月19日 Dear Friend	私は今G. アンボワーズの『中世の修道士』を読んでいる。著者は司祭か修道士で、修道院が神学、哲学、政治に影響を与えた時代の全体を論じている。	アンボワーズの『中世の修道士』の読書	
81	1948年1月4日 Dear Friend	私は封建社会の性質に関するエッセーの著述を完成させるため、フランス人、ドイツ人、イギリス人のいくつかの著作を再読している。そのうち、シャルル・セーニョボス『ヨーロッパ民衆の比較史』はとても刺激的な書物だ。	「封建社会の性質」論文への取り組み	
82	1948年5月2日 Dear Friend	今日人々は歴史的、人間的な出来事も機械や自然を扱うのと同じように扱っている。民主主義的とみなされる行為にもまた、こうした技術的な効率性の心性がみられる。学校や家での教育の改善が必要だ。	人文学が自然科学と異なることの意味	

2. グレッチェン宛書簡に同封して送られた「公開書簡」一覧

番号	日付と宛先またはタイトル	内 容	テーマ	福島県立図書館
1	1939年10月8日 村田勤宛書簡の英訳	最近の帝国議会前でのヒトラーの演説に現れた心理は、日本人も関心をもつべきだ。ヒトラーはドイツの軍隊の効率性を激賞するが、ポーランド民族の勇敢な自己防衛には一言の同情もない。	ヒトラー批判	D92-2
2	1939年10月22日 村田勤宛書簡の英訳	日本ではよく理解されていないことがある。第一にアメリカの新聞では日本より中国の状況が十分に報告されている。第二にアメリカでは日本に対する反感が高まっている。第三にアメリカ側の誤解というのは日本側の主張にすぎない。	アメリカでの日本への反感	D92-3
3	1939年10月27日 村田勤宛書簡の英訳	満州事変後、日本の政治は世界を色の付いた歪んだ眼鏡で見ている。日本の行為は不自然であり、あらゆる言葉が挑発的だ。	日本の政治への批判	
4	1940年1月13日 井上秀宛書簡の英訳	中国における日本の行為の悪評。理由は日本軍が中国を侵略し、多くの非戦闘員の中国人を殺害しているからで、日本嫌悪はアメリカの誤解によるのではない。	日本による中国侵略	D61
5	1940年1月28日 鳩山一郎宛書簡の英訳	ドイツとロシアは自由主義の諸国家の精神を理解できない。ドイツはこのためにイギリス、フランスの公然たる敵であり、アメリカの自由主義とも対立する。日本も自由主義の精神を理解できていない。	自由主義とその敵対国	D51
6	1940年9月1日 Y.Minakuchi	フランスの崩壊はすべての民主主義体制にとりよい教訓となる。だがナチスの勝利は一時的なものだろう。なぜならそれは歴史の大きな潮流に反するからだ。	ナチスの勝利は一時的なもの	D83-2
7	1940年9月8日 Mrs.S.Bartlett	全世界は混乱のさなかにあり物事は急速に変化している。続いて平和が来るだろうが調整の困難さも伴うだろう。	戦後の世界の問題	D7
8	1940年9月10日 W.G.Stoughton	民主主義はつねに道徳的な弛緩の危険にさらされている。現在の危機を生き延びるためには深い精神的な洞察が必要である。	民主主義の危機	D122-3

9	1941年4月17日 Mrs S.Bartlett	長い歴史的な見方からすれば、現在の日本は1868年の前の数十年にあった「攘夷運動」ときのようにアブノーマルなものに見える。	現在の日本の危機	D8
10	日付なし 大統領親書草稿	朝河が1941年11月23日にラングドン・ウォーナーに送ったルーズベルト大統領から天皇宛親書草稿のカーボン複写版。	日米開戦の阻止	D134-4
11	1942年1月8日 Arthur E.Morgan から の書簡	朝河の封建制の進化についての議論に対して感想を述べる。	朝河の封建制論	E278-7
12	1942年1月11日 Arthur E.Morgan	封建制以前の日本では7世紀末から8世紀初めに国家システムの改革があり、中央と地方の両方の行政が完全に変化して村落の統治も新たに形成された。ここでは日本の中世社会について説明している。	日本の中世社会	E278-7
13	1942年2月1日 William Willcox	ドイツの政治的慣習は戦後も続くだろう。ドイツの敗北後の最大の問題は、どのようにドイツを処遇するかである。	ドイツ敗北後の問題	D139-1
14	1942年2月8日 G.G.Clark	明日、敵性外国人として初めて登録に行く。大学にいる外国人を調査するF.B.I.の人物はきわめて友好的だ。	F.B.I.による監視	
15	1942年2月8日 William Willcox	ドイツの南北の地域的相違や、シュヴァーベン、バイエルン、中部ライン地方の人物はきわめて友好的だ。地域的相違について述べる。	ドイツの地域による相違	D139-2
16	1942年2月15日 W.Willcox	ドイツには長い劣等感の歴史がある。民衆に強い責任感があれば、ヒトラーのような指導者は生まれなかつたらう。	ドイツ人の劣等感	D139-3
17	1942年2月22日 William Willcox	日本では主権は天皇にのみ与えられており、司法、行政、立法の組織は、その権限を天皇の意思により持つ。日本の唯一の改革可能性は軍部の改革ではなく、天皇が彼らを追放することである。	天皇による改革への期待	D139-4
18	1942年3月1日 G.G.Clark	引越す理由は引退し給与が半分になったからだ。貯金は凍結され一週間に25ドルしか引き出せない。ただ大学は図書部長の職を三年間、同じ500ドルの給与で約束してくれた。	引越しについて	
19	1942年3月9日 L.I.Hewes	現在の戦争は自由主義の自己弛緩への罰である。枢軸国が最初に敗北主義に憑りつかれ、国家の効率性を求める近道を選んだ。	自由主義の自己弛緩	D55
20	1942年3月15日 William Willcox	自由は共同体で生活する人間が、内的な欲望を実現するために長い努力をして実現させたものである。自由には長い進化の過程がある。	人間の自由の歴史	D139-5
21	1942年3月22日 William Willcox	歴史上、天皇はつねに統治を大きな役割を果たしてきたが、天皇が自身の意見をいうのは会議が会議が分裂したときだけであり、そのような場合でも大臣に問題を再考させるのがつねであった。	天皇の役割	D139-6
22	1942年3月29日 William Willcox	民主主義は少なくとも法の前での平等を意味し、さらに経済的な機会均等を意味する。また道徳的な側面では市民個人の責任を意味する。	民主主義とは何か	D139-7
23	1942年4月5日 William Willcox	戦争に勝利した後のアメリカとロシアの問題について論じる。	戦後のアメリカとロシア	D139-8
24	1942年4月19日 William Willcox	日本の政治の中枢にいる人々はドイツ人のような「劣等感」を持っているのか。日本が劣等感の心理で特徴づけられるとは思わない。日本人は自身のものよりもよい外国のものを習得する好奇心があった。	日本人と劣等感の心理	D139-9
25	1942年5月14日 G.G.Clark	ヨーロッパの戦争の状況を分析し説明している。	ヨーロッパの戦争状況	
26	1942年8月9日 G.W.Pierson	マルク・ブロック『封建社会』を読んでいる。最初の数百頁はムスリム、ハンガリー人、ゲルマン人の侵略について述べる。ブロックは、明確に断定しないやり方で示唆的に論じている。	『封建社会』の読書	D102-2
27	1942年8月23日 S.F.Bemis	11世紀のフランスの修道士の年代記、それと同じ時代のノルウェーの法、14-16世紀の日本の内戦の記述を読んでいる。	中世資料の読書	

28	1942年10月3日 G.G.Clark	クラークの家の庭について語る。	クラークの家の庭	
29	1942年10月13日 “On Historical Imagination”	1942年9月に朝河が行った講演の草稿。「歴史の想像力について—Nicholas Murray Butler’s “The Age of the Americas” をめぐって—」	歴史学における想像力	
30	1942年10月30日 William Willcox	封建社会は相互に争う人がばらばらに存在する社会ではなく、主君と家臣の小さな強力な団体に基づく社会である。現在の科学はコントロールが難しくなっている。それはフランケンシュタインのような怪物である。	封建社会について	D139-10
31	1942年11月22日 L.Warner	ラングドン・ウォーナーの提案—忠実な日系アメリカ人を選抜し、敗戦後の日本の救済委員会を助けるために日本に派遣するという案—に答える。日系二世を派遣するよりも純粋なアメリカ人を派遣した方がよいと述べる。	日本救済委員会	
32	1942年12月8日 Arthur E.Morgan	日本の都市と農村の出生率がアメリカよりも高いことを述べる。	日本の出生率	
33	1942年12月20日 Mrs.D.H.Morris	戦争によりIALA（国際補助語協会）にとり現実の奉仕を行うチャンスが来た。私はこの7月に退職し名誉教授となり、これまで十分にできなかったIALAの仕事に打ち込む時間ができた。	IALAの活動	
34	1942年12月23日 Father R.J.Gray, S.J.	歴史的な危機が我々に文化と自由の遺産の意義を学ばせてくれる。それは我々が人間としての責任をもっていることを教える。	歴史的危機の意義	D48-2
35	1942年 クリスマス Eldon Griffin からの書簡	戦後世界のための準備についての書物を書き終えた。今、朝河から受けた教育を思い出している。	戦後世界のための準備	
36	1942年12月27日 William Willcox	あなたが10月に依頼してきた日本人の心理の研究を行っている。古代や近代の記録を比較し一定の考えがまとまってきた。同じ特徴が時間や地域を超えて現れ、社会状況の変化とともに修正されていくのがわかる。	日本人の心理の研究	
37	1942年12月29日 Eldon Griffin	戦後世界のための準備については私も日々考えている。主たる困難は、政治家がドイツ人と日本人の歴史的習性についての洞察を得ることができないことだ。外部の人間には日本人やドイツ人の本質を知ることは困難だ。	ドイツ人と日本人の歴史的習性	
38	1942年12月 Irving Fisher	来栖が日本のアメリカに対する行為に関し述べた言葉は、この10年日本の軍人が民衆を説得するために用いてきた論理の好例である。似たような言葉は、教皇庁の文書やビザンツの宮廷でもみられた。	来栖の論理	D35-1
39	1943年5月15日 退職記念パーティーでの朝河のスピーチ草稿	自身は1907年から継続して図書館の仕事をしてきた。いかに同僚たちが自分に寛大であったかを語る。	退職時のスピーチ草稿	
40	1944年2月22日 Eldon Griffin	CATS（民政訓練学校）に対し、1941年の金子宛書簡の英訳を渡したことを後悔している。金子の許可なく公にすべきでなかった。日本語版は金子が受け取ったかもしれない。後で送った英語版はイギリスの検閲で返ってきた。	金子宛の英訳書簡	D50
41	1944年2月27日 Helen Dunham	朝河が興味を持った論文“Menander’s Mirror”, “The constant things”を読んでいることを伝える。	読んだ論文の感想	D31-3
42	1944年10月8日 A.G.Keller	私が最近日本のことについて書いた書簡を送るので批評を待っている。	書簡への批評を求める	D69-1
43	1944年11月12日 Mrs.G.E.Speare	大学までの教育は自由な市民を訓練することを目指すべきだ。国家が自由であるのは人々が人文的教育を受けた程度による。政治における自由主義の成長は、世界における人間の地位が一般的に確立していく進歩の一局面である。	市民への人文的教育と自由主義	
44	1945年2月2日 G.G.Clark	私は現在、1850年代のペリーの到来以降の時代について考察している。武士や公家を書いた多くの文書を読み、この時代について研究している。	ペリー来航以来の歴史	

朝河貫一とグレッチェン・ウォレン (Gretchen Warren) の文通

45	1945年2月11日 Arthur E.Morgan	以前は、日本人の共同体の生活を歴史的視点から考察していたが、最近は、より広い比較の視点でヨーロッパと日本の制度の発展を比較している。	日欧比較史	
46	1945年2月18日 G.G.Clark	オーウェン・ラティモアの論文を読んだところだ。彼とは文通し、ニューヨークで一度会った。彼はアメリカでの数少ない私が尊敬した東アジア研究者だ。	ラティモアの論文	D20-12
47	1945年2月18日 G.E.Speare	ルーズベルトとスターリンは歴史の申し子であり歴史に学ぶ者ではない。だが、チャーチルはそうではない。アメリカ人がイギリス人を理解するのは難しい。	チャーチルについて	D118-1
48	1945年5月6日 G.G.Clark	近い将来に起こりうる国際的紛争の2つの引き金がある。それはロシアの利己的な習性とアメリカの盲目的な慈悲深い宣教師的な態度である。	将来の国際紛争	D20-13
49	1945年5月15日 G.G.Clark	ロシアはまもなく大きな問題を引き起こすだろう。ドイツの占領地に暫定政権「自由ドイツ」を作るかもしれない。	ドイツのロシア占領地	D20-14
50	1945年7月11日 G.E.Speare	チャーチルは歴史に学ぶ者であり大英帝国が果たした役割を知っている。安易な理想主義に屈したらばどんな災厄が人類に起こるかかわからない。	チャーチルについて	D118-2
51	1945年9月23日 G.G.Clark	私はベッドで自分の古い日記を読んでいる。現在1913年の箇所を読んでいる。その年、妻が亡くなり私の内面生活に深い影響を及ぼした。あなたが見たいなら、いつか見せたい。	1913年の日記	D20-15
52	1945年4月1日 William D.Geer, Publishing of Fortune	ガルブレイスの論文 Japan's Road Back を送ってもらったことに感謝する。	論文受領の謝辞	D42
53	1946年5月5日 Mary Rouse	あなたとあなたの赤ちゃんが健康であることを祈る。母親は神聖な存在であり、地上の人類に対して責任ある重要な使命を持っている。	母親の役割	
54	1946年9月29日 G.G.Clark	以前に見知らぬ人から電話があった。フランス人の教授でソルボンヌのジョオン・デ・ロングレと名乗った。彼は私に会いに来たが、『入来文書』や私の書いた論文を使い研究していた。彼はヨーロッパ中世史の卓抜な学者で日本中世の史料もよく知っている。イェールでは彼を私の後任にすることを検討している。	ジョオン・デ・ロングレ	D20-16
55	日時不明 Helen Dunham	私が今考えている問題は歴史とは何かという問いである。だが、その問いを議論できる友人が少ない。	歴史とは何か	